

調査研究の回想

小 田 福 男

I はじめに

早いもので、私が小樽商科大学に奉職して以来、35年以上の年月が経ちました。その間、旧ソ連および（ソ連解体後は）ロシアの企業経営を主な専門的研究分野としてきました。小樽は、戦前から今日に至るまでロシア極東との結びつきが強く、人的・情報的交流が盛んな地域の一つです。この点は、私の研究にとって大いに役立ちました。

赴任当時、先輩の先生方に教えていただいたことを今でも鮮明に記憶しています。「本学は、東京や大阪のような日本の中枢・大都市にある大学ではないが、研究環境は大変充実しているから、じっくりと腰を落ち着けて研究ができる。」そして、その言葉は真実でした。そうした、優れた研究環境を与えてくださった小樽商科大学および関係の皆様方に改めて、心からお礼を申し上げます。

ここでは、これまでの研究生活において印象に残ったことなどを記します。

II ロシア企業の生産職場で働く既婚女性の「勇気」

1994年に、本学後援会（緑丘会）の海外研究助成金をいただいて、ロシア極東地域のハバロフスクに半年ほど留学させていただきました。現地で、ソ連時代（1975年頃）の企業の資料を読んでいた際の印象深いエピソードです。

ある国有企業の職場での出来事。ソ連時代はソ連共産党の一方支配が職場まで貫徹していた時期ですから、1975年頃の国有企業の生産職場では、人々はソ連共産党の指示や指導に服従して、黙々と働いていたというイメージが一般的だったのではないかと思います。ところが、実際にはそうでもなかったという

ことです。ある共産党員の中年女性がソ連共産党の委員会の決定に公然と従わなかったのです。

少し詳しく紹介してみましょう。以下は、ハバロフスクの縫製工場（アパレル企業）における共産党委員会の会議録の記述です。

1) 1975年9月12日の会議：第3職場の現場管理者の補充人事について

班長や専門技術職等の欠員が生じ、3か月以上補充されていなかった。臨時で、別の職場から移動してきた職場長もうまく運営できず、辞めたい（元の職務に戻りたい）といっている。現場メンバーの協力がなく、管理者が孤立しているのが原因。

そこで、以前に班長として働いていて、今は役職なしのヒラの縫製工として働いている人を班長に復帰させることが検討されているが、本人の話によると、今は小学校低学年の子供を抱えているので、班長には復帰したくない。なぜなら、班長であれば、朝7時から夕方7時まで働かなければならない。要するに勤務がきつい。

この会議では、さしあたり、現在の職場長、専門技術職候補、班長候補の計3人の人事をどうするかが議論された。そして、以下のような決定が行われた。なお、3人ともに共産党員であって、党委員会の決定は職場の人事を実質的に決定していた。

- ① やめることを希望していた臨時の現職場長はそのまま勤務させる。
- ② 専門技術職と班長の候補として名前が挙がっている者に対して、実際にそれぞれのポスト（職制）につかせる。

2) 9月16日の会議

前回の会議から4日後に前回の人事決定の点検が行われた。そして、以下のような状況が報告された。

- ① 臨時の現職場長は、辞める意向を撤回して、決定通り働いている。
- ② 専門技術職候補と班長候補は、前回の共産党委員会決定に従わなかった。

専門技術職候補の弁明：とにかく第3職場では働きたくない。

班長候補の弁明：子供が小学校一年生で、夫は病気である。家庭の困難な事情。

このような状況の下で、党委員会は以下のように決定した。

- ① 専門技術職候補については、「人事カード記入付きの嚴重注意」処分
- ② 班長候補については、情状酌量の余地があり、少し軽い「人事カード記入なしの（口頭の）嚴重注意」処分

ソ連共産党の企業党委員会の人事決定に対する明確な違反ですから、もっと重い処分（党員資格停止、減給等）もありえたと思いますが、比較的軽い処分で終わりました。通常のイメージとは異なる点で、驚きというか意外な感じを受けたことを記憶しています。

問題になった2人のうち、個人の人事カードに記録が残る嚴重注意処分を受けた専門技術職候補については、性別をはじめ詳しいことはわかりませんが、もう一人の、口頭での嚴重注意処分済んだ班長候補は、夫や子供を有する中年女性です。「家庭の事情」でやむを得ないとも思われますが、班長という責任ある地位に就くことを拒否するというのは、それなりに「勇気」を要する決定だったと思われます。

このように、ソ連共産党一党支配の時代の国有企業の職場で、共産党の人事決定・指示に従わない、拒否した事例があり、しかもそれほど重くない軽微な処分職場にとどまり、働き続けたということでもあります。このことは、私にとって印象深い事柄でした。

もちろん、これは一つの事例にすぎないものですから、これが当時においてどの程度の広がりを持つ事柄かに関しては、これからの研究課題です（関連して、一部の研究者の間では、ソ連社会における〈緩い労働規律〉が指摘されています）。

付言すれば、この事例は、今日的には働く人々のワークライフバランスの問題（仕事と家庭の両立の難しさの問題）、女性の管理階層への進出に伴う障壁（バ

リア)の問題にも通じるものであります。

Ⅲ ロシアの低層住宅産業の研究

北海道経済の活性化が大きな課題になり、そのための一つの方向として、北の隣国ロシアとの交流の促進が各方面で取り上げられるようになりました。その中で、北国の北海道の特徴としての、住宅関連の寒冷地技術の蓄積に注目し、その技術的優位性を生かして、地域間国際交流を促進していこうという動きが生じてきました。

他方、ロシアではソ連体制の崩壊後、市場経済体制に移行し、基本的には自由に自分の住宅を建てることができるようになりました。社会主義時代には、国家の計画で住宅が建設・供給されるのが基本でした。

都市部ではほとんどが集合住宅（アパート）でした（ただし、地方の都市では一部に低層の住宅も併存していました）。そうした中で、市民が自由に自分好みの住宅を建てるようになると、低層一戸建て住宅の比率が上昇していくであろうと予測できました。

このような、ロシアでの低層住宅に対する需要の高まりの予測と北海道における技術的資源（高断熱高气密等の技術）の蓄積を背景に、ロシアでの低層住宅建築の研究を始めました。

まずは、ロシアでの実情を把握するために、ロシアの住宅建築業界、住宅資材産業、住宅建築主等を訪問調査しました。北海道からの進出の試みについても訪問調査しました。実際に、ロシアでは、低層の一戸建て住宅が都市近郊に雨後の筍のように出現してきました。

まず目立ったのは、大きな邸宅でした。建築面積で500~1000㎡の豪邸がぼつんぼつんと建築されました。レンガ・石・コンクリート等のできた堅牢性重視の家で、社会の治安状態もあまり良くなかったこともあって、保安・警備にも気を使っていました。このような豪華な住宅は、社会的ステータスを示すシンボルでもありました。同時に、それよりも小さい住宅の建築も増えてきました。生活重視で、省エネルギーにも配慮した住宅も増えてきました。それに関

連して、住宅団地の中に集中立地して、一戸当たりのライフライン（電気・ガス・上下水道等）整備コストを引き下げたり、一戸当たりの住宅警備保障コストを節約したりしている住宅が増えてきています。

このような現地調査のために、モスクワ、ハバロフスク、ウラジオストック、ナホトカ、ユジノサハリンスク等のロシアの都市をたびたび訪問し、数多くの様々な低層住宅を見ることができたことは、私にとって印象深くまた興味深いことでした。

締めくくりにあたって、本学付属図書館の正面玄関横に掲げられている文を改めて引用します。

「生命は短く、学術は永い。」

今更ながら、痛感しています。

2015年10月16日記